戦没者のご冥福と永遠の平和を願って

島根県　内藤静夫

あの忌まわしい戦争が終わってから四十年たち、いま私たちは平和な生活を続けており、「どこでそんな戦争があったか」と思うほど忘れ去られようとしており、また忌まわしいことは早く忘れてしまいたいのが人情でしょうが、しかし悲惨な戦争の事実を記録として残すことにより、悲憤のうちに尊い犠牲となられた方々の霊をいくらかでも安らげることができ、また後世の人々の戦争回避への資ともならばと思い、戦没者にかわって戦争の体験者の一人がその責務として四十数年前の往時を、記録をたよりに記述したいと思います。

しかし何ぶん四十数年前のこととて、あった事実は覚えていても、その日時等については必ずしも定かでないのは仕方がありませんが、いつわりや誇張することなく、事実を忠実に記すことにいたします。

私は昭和十九年に繰り上げ徴兵検査の結果、甲種合格となり、十二月九日に中支派遣藤第六八六五部隊の補充要員として我が家を出て、翌十日浜田の西部第三部隊に入隊しました。

出征に先きだち八日午後の加佐奈子神社における祈願祭に臨み、武運長久を祈り、九日は厳寒の朝でしたが、未明に家族と水杯を交わし、村境でみなさんの歓送に臨みました。当日の出征者は安達房夫（広島の工兵隊）向村忍、福田義正、小川清、和田春光、小草満夫、金恵信夫、井上宏の諸君と私を合わせて九人でした。

みなさんの盛大な歓呼の声と万歳に送られて勇躍出発はしましたが、戦場に赴むく身なれば「生きて再びこの土が踏めるだろうか」とまさに後髪を引かれる思いがし、また、だれ一人生還を期した者はいなかったでしょう。果たしてこの日出征した者のうち、福田義正、金恵信夫の両君が尊い犠牲となられ、だれ一人墓参することもない異国の丘で寂しく永遠の眠りについております。

西部第三部隊に入隊した私たちは、十九日に藤部隊へ

の転属命令を受け、浜田を出発しましたが、すでに満足に行きわたるほどの銃もなく、竹筒の水筒をぶら下げての異様ないでたちで年の瀬も迫る二十六日ころ南京に到着し、状況不利で奥地の原隊行きが困難とのことで、やむなく二十年二月十日ころまで滞在し、その後行軍によりあくまで原隊へ向かう隊員と、南京にとどまる隊員とにわかれ、福田、金惠の両君と私は藤部隊教育隊員として残留することになりました。

ところで、南京到着後から私は水が合わないせいか下痢となり、医務室に行こうにも初年兵の身であれば「下痢はタルンでいる証拠だ！」と衛生軍曹にどやされるがおちと、ときには演習中にも、きたない話ですが、たれ流しのこともありましたが、我慢して押しとおし、小康は得たものの結局は慢性となり、復員するまで続き、本当に苦労しました。これが旧帝国軍人の初年兵の一コマです。

それからの戦況はますます不利で、七月入り本土防衛のため帰国と称し、部隊移動を起こし、七月末ころ満州まで北上し、公主嶺において原隊に合流しました。そのときには、南京で別れた諸君は全員が中支の他部隊に転属されており、再会はできませんでした。

やがてソ連軍の参戦により、直ちに臨戦体制に入り、福田、金惠両君とも別れ、頭髪に爪と遺書を連隊本部に託し、個人認識票を身につけて四平街の近郊に布陣しました。

このとき、石野の山田正造さんにちょっとお逢いしましたが、お互い任務遂行中であり、本当にあっけない出会いでした。

折角布陣したにもかかわらず幸いといますか、ソ連軍とは一戦も交えることなく終戦となりましたが、私らがその報を受けたのは十六日で、これがもう一日遅れていたらどうなったやらと今でもゾッとする思いがします。

この時点から項をわけて記述しますと、

終戦直後からソ連行き

ご承知のように当時の満州には数多くの民間邦人がおられましたが、男性はすべて応召され、残るは婦女子ばかりのところへ終戦による大混乱に加え、ソ連兵の物品の強奪、加えて現地人による暴動等で妙齢のご婦人が白

粉ならぬ鍋ずみを顔にすり込み、男装で背に手に幼児をつれて右往左往逃げまどう姿は、まさに地獄絵図で、その後思い余って中国人に託された子供たちが、いま肉親を捜し求めているのです。

私たち軍人は終戦の報を受けるや、ときの戦陣訓の「生きて虜囚の辱しめを受けるな！」に、心ならずもお別れして直ちに武装を解き、ソ連軍の捕虜となり、四平街の貨物廠に入り、ここで使役に従事しました。ここには弾薬以外の医療品、食料、馬糧等、すべての物品が当時関東軍が孤立しても数年間は戦えるほど備蓄してあったとかで、一日朝、夕四十両仕立ての貨物に物品の積み込み作業をして、ソ連向け送り出しました。さしもの物量も十月中旬にはすべてが終わり、その時点で今度はその貨車に私たちが乗り込み、満州経由でシベリアに向かい、出発しました。満州内でとまる駅々には、逃げ遅れたであろう邦人婦女子の方の生活の糧を得ようと、駅頭での物売り姿があり、自由を奪われた私たちもなけなしの金で買ってあげ、幼児の頭をなでて別れを惜しみ、ソ連入りをし、十一月三日の夜中にイルクーツクに到着しました。

シベリア生活

イルクーツクは、バイカル湖畔にある工業都市で、昔の帝政ロシア時代の流刑地であり、その罪人がそのままいついてできた町といわれ、そこの第二収容所に収容されました。

冬期は朝八時ごろに夜が明け、夕四時には日没と、もちろん日中でも太陽はおがめず、白夜の状態が続き、また、日中とて零下五十度以下になることもしばしばあり、それでも休日以外は休みとてありませんでした。

仕事は雑役（工場、アパート清掃、大工の手伝い、立ち木の伐採等）でしたが、一番怖いのは凍傷で、二千人いた収容所で、一日半分は大なり小なり凍傷となり、ひどい人は足を失うような人もいました。

一番大変だったのは、貨物駅での夜間待機で、今夜は石炭やセメントの貨車が入るからとの召集で、ダイヤがあってないようなシベリア鉄道のこと、貨車が入り、仕事があればよいものの、一晩中火の気のない寒夜に腹は減り、死ぬよりつらい思いで、とにかく動きまわってい

なければならないのに、中にはコッソリと石炭山にカマクラのような洞穴を掘り、中にかくれて発見されないまま凍死するという痛ましい人もいました。

さらに主なことを列挙してみますと、

食事……支給されるのは大豆か粟かコーリャンのいずれかの雑炊のようなものが飯盒のふたに八分目くらい、夜はこれに黒パンの大人のこぶし大が一個です。従って不足分は命がけで食糧庫などに忍び込み、独自で調達し、しかもすべて岩塩をつけ生食いですが、一番うまいと思ったのはキャベツの凍ったやつでした。

便所……屋外でムシロ囲いの中に中約五十センチ、深さ約一メートルの溝が短冊のように掘ってあり、真冬には黄金がたちまちカリン糖に！

病気……外傷はともかく、熱がなければ病人にしてもらえず、腹痛、下痢、神経痛はもとより、栄養失調もぶっ倒れるまでと、このため数多くの方々が尊い生命を失われました。また聴診器は日本の江戸時代に漢方医が持っていたようなやつでやっていました。

寒さ……寒いというより体が痛いようで、発熱者があれば冷やし用には水筒に水を八分目くらい入れて、屋外に一分間置けば氷のでき上がりです。

点呼……日本人は二千人を掌握するのに十分間もあれば完了ですが、ソ連兵は一中隊の五十数人を確認するのに二人がかりで三十分はかかり、あとはおして知るべしで、冬場は仕事以上につらいことでした。

身体検査……毎月一回夜、うす暗い裸電球の下で軍医（日本でなら准看程度の女医）が、ふんどしもしない真っ裸の一人一人の胸と、尻の肉をつまんでそのつき具合で一級二級とランクづけをして、重労働、普通労働向けの判定をされました。

日本語新聞……洗脳用が月一回発行され、退屈しのぎにはよかったのですが、これで初めて徳田球一や野坂参三を知り、また本庄村が共産党村になったことはデカデカと載せてありました。

このような状態で二十一年を迎え、五月末ごろ二千人を半分に分け、どちらか一方がダモイ（帰るの意）とのことで、そのダモイの方を願っていたところ、私たちはその方に選ばれ喜んだのも束の間、貨車は西方に向かい

約二十日がかりでタシケントに到着しました。その移動中、栄養失調のため私は鳥目となり、夕暮れから夜間になると目が見えず、もうこれで一巻の終わりかと情けない思いがしました。

タシケントでの生活

タシケントとはソ連邦体制のウズベック共和国の首都で、中央アジアに位置してＮＨＫの特別番組「シルクロード」でも紹介された気候も温和なところで、イルクーツクよりはましでしたが、「ここまで来ればもうどうにでもなれ！」といった気持ちになったことも事実です。

また、ここでの仕事も工場等の雑役が主でしたが、主なことを挙げてみますと、

作業のノルマ……イルクーツクでもそうでしたが、ソ連では全労働について必ずノルマ（目標）が課せられ、これが「働かざる者食うべからず」のゆえんであり、とにかく一〇〇％の達成が必須要件で、このため本当に苦労しました。ちなみに畑の麦刈りで一人役約一反歩、鉄道建設の土掘り同じく一立方メートルといった具合です。

お食事……イルクーツクより多少はよくなりましたが、それでも知れたもので、ここで私たちに幸いしたのは、野外で容易に動植物がとれたことで、よもぎにあかざ、野生ごぼう、ヘビ、カエル、ねこに犬、亀、ラクダ等人肉以外で口にできるものは手当たり次第で、このためか困った鳥目もいつの間にか治っており、ほんとうにホッとしました。

農作業……秋に農場要員の募集があり、タラフク食えるつもりで応募して、国営農場に行きました。およそ農場などといえそうもないところで、広大な土地「イバラといっしょに麦がちるな！」といった感じの麦を刈り取り、調整が仕事でしたが、切れの悪い鎌で、しかも日中は暑くて仕事にならず、その間を避けての一反歩は悪戦苦闘であり、刈取りが終われば脱穀調整ですが、これがまた前近代的で広場に集めた麦を、直径十メートルぐらいの円型に厚さ二十センチぐらいに広げ、その上を馬に石臼を引かせ脱穀し、そして落とした麦で唐みのでふるうわけですが、唐みのはなるほど日本製で動力式のもの

でしたが、いかんせん動力がなく、これを私たちの手で回させ、ちょっとでも手回しがにぶくなると、「ダワイダワイ」（しっかりやれの意）と背中に実弾入りの銃をあてがっての督励で、もし暴発でもしたらと冷や汗をかきながらの仕事で、タラフク食うどころか食事内容はあいも変わらずでした。

洗脳……厳しい作業を終え、夜は夜で反軍闘争とか民主運動とかの名目で洗脳教育もあり、早く帰るためには一生懸命頑張りました。資本論、マルクス・レーニン主義、唯物論など難解な本には眠気ばかりつきました。

ダモイ

こうした中でいつしか日がたち、二十三年五月中旬ごろ、ダモイ命令が出ましたが、ソ連兵のうそにはなれっ子の私たちも、半信半疑命令に従って東方行きの貨車に乗り、途中イルクーツクで一日の休養があったものの、二十六日がかりでナホトカに着き、日本国につながる海をながめて望郷の念をつのらせました。

しかし洗脳のでき具合いか？また奥地へ逆行組もあるとかで安心するわけにはならず、希望を胸に秘めて作業に従事するうち、どうやら合格となったようで、七月十一日に恵山丸に乗船して舞鶴に上陸、十五日懐かしの我が家に生還しました。

以上が私のいつわりのない体験ですが、それでも私のように生き残れた者は幸せで、日清日露の戦役以来二次世界大戦の終わるまでの間、御国日本のための名目で各地の戦線で、あるいは銃後でまた強制抑留のもとで犠牲になられた方々、さらにはその遺族の方々の心情を思うとき、「戦争は本当に悲惨なものだ。今後絶対にしてはならない」と痛感するのは私のみならず、万人の願いだと思います。

そして今や日本国は平和を保ち、経済大国として世界に君臨し、私たちは安穏な生活を営んでいますが、このような状態になれたことは日本国憲法の下で政治のしからしめるところとはいえ、さきに述べた尊い犠牲者の礎によってもたらせたものであることを痛感し、ここに心から感謝し、そのご冥福を祈るとともに永遠の平和を願って筆を擱きます。